

○ 環境動態学概説 (Thresholds in Environmental Dynamics)

－ 2011年度(平成23年度)後期開講 共通教育一般科目 －

○ 国際社会論特論B (Special Lecture on International Society - B)

－ 2011年度(平成23年度)後期開講 国際学類選択指定科目 －

開 講:水曜日1時限
講義室:E10講義室
定 員:100名

○授業の主題

この授業は開放科目として「国際社会」と「環境動態」の両分野を同時にあつかう。前者は自然からはなれた人あるいは社会のこのみのように感じるだろう。後者は自然のいとなみととらえられがちだ。しかし、両者は切り離せない関係にあるどころか、時間と空間とに連続する事象と考えれば同じものともいえる。

環境動態学とは耳なれない分野かもしれない。環境についてのさまざまな学問分野について、あるいは複数の分野をあわせながらそれらの動態について考えるものだ。動態とはものが動いている状態を意味する。変化し続ける状態そのものが動態だ。しかし、自然界にも社会にも静止したものがあるだろうか。方丈記に「行く川の流れば絶えずして・・・」とあるとおり、また仏教に刹那という概念があるように、変化なく静止したものは世の中にはないと思えるべきだろう。

環境ということばはどうだろう。これほど個人の主観で都合よく用いられていることばはないと思う。自然環境、国際環境、家庭環境といった区分ができそうだが、どこまでの空間をもってこれ定義するかは人によってさまざまだろう。ある環境を定義するにはその主体となるものが必要だが、個人でも社会でも、ある生物でもこの主体になりうる。主体がたとえ決まったにしてもある環境を空間的に限定することは不可能だ。つまり環境とは空間的に連続したものといえる。

環境動態を考えるときには時間も空間も連続体であり、ある瞬間で止めたりある範囲で区切ったりできないことをまず理解してもらいたい。たえず変わり続ける自然や国際社会のありのままの姿を理解するにはこの認識が不可欠だ。この授業では、このような自然や国際社会にみる環境とその動態、あるいは時間と空間の連続性について考える場を提供したいと考えている。

○準備している話題

この授業では自然と国際社会について、いくつかの実例を担当教員のこれまでの調査研究活動などに題材をとりながら進めていく。具体的には以下を予定している。

1. 「環境動態学」とは何か:「環境」とはなにか、「動態」とはどのようなものかについて説明し、時間と空間の中で環境をとらえるという考え方を解説する。
2. 生物としてのヒト:ヒト(Homo sapiens sapiens:いわゆる「人間」のことであるが、生物学上の種として示すときはカタカナ表記)は哺乳類の一種でありながらもきわめて特異な進化をとげた生物ということが出来る。国際社会を理解するうえでも、環境動態を解釈するうえでも「ヒト」の理解はかかせない。そこで、ヒトとはいったいどのような生物なのか、自然環境・社会環境の変化の中でどのような進化の過程をへて現在にいたったと考えられているかをまず解説する。
3. アンコール遺跡群(1. クメール文明とアンコール遺跡):世界遺産の白眉ともいえるアンコール遺跡はかつてカンボジアの地に栄えたクメール文明が残した寺院や王宮などの複合体である。アンコールワットに代表される遺跡の概要をのべたうえで、その当時の社会構造、とくに農業生産を支えた水管理などについて解説する。
4. アンコール遺跡群(2. 観光産業と環境破壊):押しよせる観光客とそれをめあてに暴走する観光産業によって遺跡では環境汚染が顕在化している。この過程を社会構造の変化とあわせて説明し、開発と保全という両側面からみた環境問題について考えてもらう。

5. **アンコール遺跡群(3. 国際協力と地域住民)**:アンコール遺跡世界遺産公園はさまざまな国際協力の舞台ともいえる。2011年6月時点で18カ国60チームがここで遺跡の修復、考古学的発掘、環境保全などの活動を展開している。その一方でアンコールは地域住民がそのままの生活をいとなむ世界遺産でもある。国際社会と地域社会の両面をあわせもつアンコールについて解説する。
6. **カンボジアのトンレサップ湖(1:その形成と変遷史)**:東南アジア最大の湖であり世界でも最高の生物多様性をもつとされるこの湖について、誕生した理由や、5500年前の大変化、現在の自然、そして今後の変化などについて、この湖の歴史を地球環境の変化の中でとらえ説明する。
7. **カンボジアのトンレサップ湖(2. 生物多様性と地域住民)**:トンレサップ湖はカンボジアの社会や文化を支えてきたといってもよいほどの存在である。この湖がほころ生物多様性やそれが維持されるしくみについて、地域住民の活動や生活、そして住民活動が生態系へ与えるインパクトについて解説する。
8. **東南アジアのマングローブ林**:熱帯の遠浅の海岸のみに生育するこの森林は地球環境の変化とともにその立地条件を変化させてきた。このマングローブ林の重要性とその変化について説明するとともに、開発によって次々と消滅するマングローブ林の実態について解説する。
9. **スマトラ-アンダマン津波**:2004年12月のスマトラ大地震によって引き起こされた大津波はインド洋各地に破壊的な被害をもたらした。タイの南海岸もこの津波による被害を被ったが、濃密なマングローブ林がこの被害を低減させた地域もある。スマトラ大地震津波について、また、津波とマングローブ林、そして地域社会との関連について解説する。
10. **英国ウェールズ地方の地質**:近代地質学の発祥の地であるウェールズ地方に題材をとりながら、地球上の生命の誕生からその爆発事件、そしていくたびとあった大量絶滅事件について解説し、地球における生命とその変化について無機的環境との相互関係をふまえながら説明する。さらに、人類が偶然にも誕生したいきさつやその現在にいたる進化と特殊化についてもふれる予定である。
11. **フランスのジュラ山脈の地質**:時代名ともなっているフランスのジュラ山脈は、かつて北上を続けたアフリカ大陸がヨーロッパ大陸と衝突したことで形成された褶曲山地である。同じような事例はインド亜大陸とユーラシア大陸によるヒマラヤ山脈の形成がある。ジュラ山脈の地質に題材をとり、大陸の移動が地球環境に与える影響について解説し、約1億年先の地球環境について考える材料を提供する。
12. **まとめ**:これまでにおすすめしてきた自然環境や国際社会にかかる事例をとりまとめ、これらをひとくくりにした「環境動態」について、履修生全員とあらためて考えなおす回とする。

○評価の方法・評価の割合など

1. 授業には3分の2以上の出席を必要とする。
2. 最終的な評価は毎回のミニレポート(70%)と課題レポート(30%)で判断する。

○テキスト・参考書など

テキストは使用しない。毎回の授業時にプリントを配付する。参考書はそのつど指示する。

○休講予定(補講は2月9日)

11月16日:第48回東アジア・東南アジア地球科学計画委員会(タイ)

12月14日:第16回アンコール遺跡国際管理委員会(カンボジア)

○オフィスアワー

いつでも。ただし、事前にメールか電話で在室を確認すること。

環日本海域環境研究センター 塚脇真二
 tukawaki@t.kanazawa-u.ac.jp
 or shinji108@ovi.com
 電話:076-264-5814 or 5990